

はじめに

新宮市教育委員会 教育長 速水盛康

二〇世紀、二度の大きな戦争を契機とし、こうした惨劇を二度と繰り返さないため、一九四八年十二月十日、第三回国際連合総会において、「すべての人民とすべての国が達成すべき共通の基準」として「世界人権宣言」が採択されました。ちょうど七十五年の節目となります。

しかし、ウクライナでの戦争に続き、イスラエルとハマスによる武力衝突が発生し、子ども、女性をはじめとする多数の民間人の被害が連日報道され、心を痛める日々が続いています。

人間は誰もが、「人権」という自分らしく幸せに暮らす権利をもっています。日々、当たり前と感じている日常が一瞬にして踏みにじられる、この最大の人権侵害といわれる戦争を目の当たりにし、改めて「人権」の大切さ、そして「人権」を守り、後世へと引き継いでいくことの責任を痛感したところです。

そうした中、今年も市内小・中学校の先生方の熱心なご指導とご協力により、人権作文集「春を呼ぼう」第十九集の発刊を迎えることが出来ました。作品からは、次代を担う子どもたちが日常での気付きから、私たち一人ひとりがかけがえのない存在であることを学び、着実に成長している様子がしっかりと感じられます。この「人権」の危機ともいえる社会情勢の中、未来への希望がたくさん詰まった、私たちに勇気を与えてくれる作文集となっています。

この作文集をより多くの方々にお読みいただき、差別のない、市民の誰もが笑顔で心豊かに暮らせる新宮市の実現に向け、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、この文集発刊に当たり御尽力をいただいた市内小中学校をはじめ関係者の皆様方に対し、心から感謝を申し上げ、ご挨拶いたします。

★小学生の部★

おかあさんのやさしいこと	高田小学校一年
ただいま	神倉小学校一年
わたしのかかちゃん	王子ヶ浜小学校一年
いろいろな国の人となかよくなるために	熊野川小学校二年
ごめんね	三輪崎小学校二年
新たな家族	三輪崎小学校三年
ありのままの自分で	神倉小学校四年
仲直りするまで	王子ヶ浜小学校四年
手話こうざ	熊野川小学校四年
色んな性	高田小学校五年
差別のない世界	神倉小学校六年
文字を学ぶことの大切さ	王子ヶ浜小学校六年
勉強	熊野川小学校六年
「人権」って何だろう	三輪崎小学校六年

★中学生の部★

本当のヒーロー	城南中学校一年
自分	熊野川中学校一年
価値観	光洋中学校一年
「言葉」が人を繋ぐ	緑丘中学校一年
仲間への信頼	城南中学校二年
「ありがとう」を言いたい人	熊野川中学校二年
変わりゆく人権	高田中学校二年
個性豊かな社会であるために	近畿大学附属新宮中学校二年
障がいの区別はいるのか	近畿大学附属新宮中学校二年
一人にさせない社会のために	近畿大学附属新宮中学校二年
全員が希望を持てる社会を	光洋中学校二年
イメージをなくそう	緑丘中学校二年
認知症について（高齢者の人権）	城南中学校三年
多様性社会	熊野川中学校三年
在るべき日本にするためには	光洋中学校三年
「相手を思いやる気持ち」について	緑丘中学校三年

小学生の部

おかあさんのやさしいこと



高田小学校 一年

ぼくのおかあさんは、あさからいそがしいです。あさごはんを
よういして、おべんとうをつくったり、いもうとのほいくえんに
いくじゅんびをしたり、ぼくたちをおこしたりします。

おかあさんは、りょうりがじょうずです。りょうりもおいしい
です。ぼくは、おかあさんのにくじゃがが一ばんすきです。

まい日、五人ぶんつくってくれます。

おかあさんは、やさしいです。せんたくをずっとほしてくれま
す。べんきょうもいっぱいおしえてくれます。

ぼくは、おいしいごはんをつくってくれたり、べんきょうをお
しえてくれたりしてもらったら、

「ありがとう。」

とおかあさんにいます。すると、おかあさんは、いつもにつこ
りしてくれます。そんなとき、ぼくは、いい気もちになります。

ただいま



神倉小学校 一年

まいあさ、学校へいくときに、わたしのかぞくは、

「がんばってね。いってらっしゃい。」
といってくれます。だから、わたしは、とてもうれしくて、学校
をたのしむことができます。

学校からかえると、たまに、だれもないときがあります。だ
れも、

「おかえり。」

といってくれないので、とてもさみしいです。そんなときは、と
なりにすむおばあちゃんのおうちへいって、

「ただいま。」

というと、おばあちゃんは、

「おかえり。」

といってくれます。たまに、おばあちゃんもいないときがあるの
で、そんなときは、おかあさんにでんわして、

「ただいま。」

といいます。そうすると、おかあさんが、かえってきてくれるの
で、うれしいです。

さきに、おねえちゃんが、いえにかえってきているときもあり
ます。そんなときは、おねえちゃんが、

「おかえり。」

といってくれるので、うれしくて、えがおで、

「ただいま。」

といいます。

よるになると、おとうさんが、かえってきます。わたしは、う
れしくて、おとうさんに、

「おかえり。」

と、えがおでいいいます。おとうさんも、えがおで、

「ただいま。」

といってくれます。

わたしは、かぞくのみんなが大すきです。これから、かぞくに、

「ただいま。」

「おかえり。」

といいたいです。

わたしのかかちゃん

王子ヶ浜小学校 一年



わたしのおかあさんは、かかちゃんです。わたしが小さいときから、そうよんでいます。

かかちゃんがつくるごはんは、いつもおいしいです。とくに、わたしはオムライスが大すきです。おいしくってたくさんおかわりをします。

かかちゃんは、わたしがはみがきをしているとき、ちゃんとみがけていないところをおしえてくれます。やさしくおしえてくれるので、とてもうれしいです。

あるとき、わたしはたいちょうをくずして、体がしんどくなっていました。いつもいそがしいかかちゃんに、わたしはしんどいよといえませんでした。でも、そんなわたしを見て、かかちゃんは、すぐに気づいて、やさしくお世話をしてくれました。ありがとうございました。ありがとうございます。

わたしが、あさ学校にいくとき、かかちゃんはいつも

「きょうもがんばってね。」

といってくれます。すこしげん気が出ないときもあるけど、そう

いわれると、なんだかがんばれそうな気がしてきます。いつもわたしのために、がんばってくれているかかちゃんがほんとうに大すきです。これから、なかよくいっしょにくらしていきたいです。わたしは、かかちゃんのために、せんたくものをたんだり、おへやのかたづけをしたりしたいです。たくさんありがとうもいいたいです。

いろいろな国の人となかよくなるために

熊野川小学校 二年



ぼくは、二つのお話を読みました。

一つ目のお話は、「ハンナのなみだ」です。よし子さんは、ことばがわからないハンナさんと二週間すごして、なかよくなったお話です。ぼくも、ことばがわからなくても、一生けんめいみぶり手ぶりをしながら話すと、いろいろな国の人となかよくなれるかなと思いました。

二つ目のお話は、「ナシゴレン」です。きゅうしよくにナシゴレンが出てきて、りょう理の名前をからかうけど、なかなかおりをしてなかなかなるお話です。りょう理の名前がおもしろいからと言って、からかってはいけなと思います。みんなでなかよくおいしく食べたほうが、楽しいからです。

二つのお話は、いろいろな国から来た人たちは、日本がだいすきというところにいます。二つのお話を読んで、いろいろな国の食べものを食べて、いっしょにあそびたいと思いました。がんばって、えい語をべんきょうして、話をたくさんして、いろいろ

ろな国の人となかよくなりたいです。

ごめんね

三輪崎小学校 二年



なかがいい友だちと、パンダハウスでけんかをしてしまいました。その日は、友だちとしばらくあそびませんでした。なのでまわりのみんなが心ばいそうな顔をしていました。それまで楽しかったのに、きゅうにしずかになりました。

ママがむかえにくるまでに、なかなかおりしたいと思いました。ママが来る時間が近づいてきたとき、友だちがロッカーに何かを入れていました。そして、友だちが、「ロッカーの中を見て」

と言ってきたので、わたしはロッカーの中を見ました。ロッカーの中にはかわいい絵がおかれていました。その絵を見てわたしはうれしくなりました。そして、わたしも紙にありがとうと書いて、友だちにわたしました。わたすときに、わたしは、

「さっきはごめんね」

と、言いました。すると友だちも、

「うん、いいよ。ごめんね。」

と、言ってくれて、なかなかおりができました。心ばいしていたまわりの友だちも、ほっとした顔をしていました。なかなかおりができてよかったです。

これからは、すぐにごめんねと言いたいです。そして、みんなとこれからもなかよくあそびたいです。

新たな家族

三輪崎小学校 三年



私には新しい家族ができました。妹です。四月三日に生まれ、今はもう七ヶ月もたちました。弟が一人いますが、私が三才でずいぶんなので生まれた時のことはわすれてしまいました。

妹は、生まれた時はすごく小さい足で七センチでした。私は、妹が生まれてから早く帰り、勉強を終わらせたら、だっこをしたり、おもちゃで遊ばせたりしました。お母さんは大変です。なぜなら、妹のせわはすごくつかれます。三ヶ月前にねがえりができるように、気がついたらキッチンやおふろばに行っています。体重も重たくなってきたから、だっこするとすごく重くなってきたとかんじます。また、私がならい事の日車にのせるとおこってないてきます。どうしておこっているの、と思いますこしふあんになります。

そんな妹は、すごく目が大きいです。お父さんの目より大きいです。たまに友達がくると妹は、だれと思っているかのようにきょろきょろします。さいきんは、私が手をたたくと私の方にはいいしてきてとってもかわいいです。妹はまだしゃべれません。なので私はないていたらあそんであげる、わらっていたらごきげん、などおぼえてがんばっています。

私の妹は、まだはいはいしかできないけど、そんな妹はかわいくて小さいので大好きです。これからは、もっと大きくなるのでそれが楽しみです。

ありのままの自分で

神倉小学校 四年



私は、以前ある動画を見ました。それは、男性の人形作家が粘土で女性の体を制作しているというものです。私は、とても素晴らしい作品だと思ったのですが、動画のコメントらんに、こんなことが書かれてあったのです。

「男性が女性の体を作るのは変」というものです。

私は、そのコメントをみた時、自分が作りたいと思うものを作ることは、自由ではないかと思ったのです。

私が保育園に通っていたころ、同じような経験をしました。それは、車のおもちゃで遊んでいた時に、女の子の友達に

「なんで人形で遊ばないの。女の子でしょ。」

と言われたことです。私は、男の子だから、女の子だから、こうしないといけない、してはいけない、などということはないし、自分の好きという価値観は人に左右されるものではないと思うのです。

神倉小学校では、男女で色を分けたり、男女別に並んだりしていません。出席番号も男女一緒です。また、近くの中学校、高校では、女子はスカートだけではなく、ズボンも選んではくことができますと、おばあちゃんから聞いたことがあります。私はそれを知って、これまで、当たり前のようにされてきたことが、少しずつ変わってきているのかなと感じました。

自分を押し殺して周りに合わせた生活をしていると、自分の個性や価値観を見失ってしまうと思います。

人によって当たり前は違うので、人それぞれが持つ価値観をお

互いが認め合うことが大事です。そして、ありのままの自分でいられるように人と人がお互いに個性や価値観を認め合える社会になってほしいなと願っています。

だから、私はまず周りの友達の個性を認めることから始めたいと思います。

仲直りするまで

王子ヶ浜小学校 四年



ぼくには、仲よしの友達がいます。その友達のことを「さんちゃん」とよんでいます。ぼくが一年生でさんちゃんが二年生の時にさんちゃんとケンカになりました。ケンカになったきっかけは、二人ともやりたいことがちがうから、言いあらいになりました。自分の方が悪いとわかっていたけれど、どうしてもあやまれずにぼくもさんちゃんも家へ帰りました。早く帰ってきたのでびっくりした兄ちゃんが、

「ケンカしたん。」

ときいてきました。色々、事情を話しました。その時にやっぱり自分の方が悪いのに、さんちゃんの方がちょっと悪いみたいな言い方で兄ちゃんに話しました。そしたら、兄ちゃんは、

「それは、お前の方が悪い。」

って言いました。そして、あやまりかたのアドバイスや、どうやってさんちゃんの家に行けばいいか、その後何をすればいいか、どういうせっし方で遊べばいいかなど、色々なアドバイスをくれました。それから、あやまりに行きました。さんちゃんの家は、自

分の家より高い場所にあるので坂を登らないといけません。だから坂を登る時にすぐドキドキしました。坂を登り終わったらおくの方にさんちゃんがいきました。さんちゃんと目が合いました。そしたらさんちゃんがすぐに自分にあやまってくれました。今度はアドバイス通りに遊びました。水でっぽうで遊びました。いつもより楽しく遊べました。理由は、さんちゃんも自分もいい気持ちでした。次の日もまたその次の日もさんちゃん家へ行きました。行くとたびにさんちゃんは、よろこんでいっしょに遊んでくれます。さんちゃんから遊びにさそってくれるとぼくもうれしくなります。このことがきっかけでぼく達は、さらに仲よくなりました。

手話こうざ



熊野川小学校 四年

学校で手話こうざがありました。耳が聞こえない方と、手話通やくをする方が来てくれました。

こうざの中で心にのこったことが二つあります。

一つ目は、手話がいいにも、コミュニケーションを取る方法があるということです。ジェスチャーや、空書、口話、ひつだんで伝え合うことができるそうです。でも、口話だけだと伝わりにくい言葉があるとのことでした。例えば「たまご」と「なまこ」です。口の形が同じだからです。みなさんも声に出さずに口の形を作ってみてください。伝わりにくいのが分かります。このような時は、ジェスチャーでたまごをわるしぐさをしながら「たまご」と言うと伝わりやすいと教えてもらいました。

二つ目は、生まれてからのことです。耳が聞こえない人が通う学校は和歌山市にあったので、小さいころからお家の人とはなれて、りょうで生活していたそうです。りょうでは、ふとんを自分でたたんだり、お皿をかたづけたりしていたそうです。わたしは、サポートしてくれる人が全部やってあげているのかと思っていたので、それを聞いてとてもびっくりしました。そして、とても大変だったのだなと思いました。

わたしは、手話を教えてもらうのがとても楽しかったです。それは、教えるに来てくれた方がおもしろくて、笑顔で、やさしかったからです。耳が聞こえなくて大変なのにすごいなと思いました。手話こうざの中で、「おはよう」や「こんにちば」、「こんばんは」、「おやすみなさい」の四つの手話を教えてもらいました。耳が聞こえない人に出会ったら、教えてもらった手話や、ジェスチャーなどを使ってお話したいと思います。耳が聞こえない人も、聞ける人も、いっしょに笑顔でいてほしいなと思います。

色んな性



高田小学校 五年

みなさんはこの言葉を知っていますか。

「LGBTQ+」

聞いたことがある人いると思います。LGBTQ+とはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニングまたは、クィアの頭文字を組み合わせた、性的少数者を表す言葉の一つです。レズビアンとは、好きになる人が女性で

ある女性のこと、ゲイとは、好きになる人が男性である男性のこと、バイセクシュアルは、男性でも女性でも関係なく好きになる人のこと、トランスジェンダーは、心の性と身体の性が一致しない人のこと、クエスチョニングまたは、クィアは、心の性や好きになる性を決めない人または、決めたくない人のこと、プラスはLGBTQ+だけでは、表しきれない、多様性のあり方があることを表現しています。

このLGBTQ+である人達の権利はまだまだ認められていません。日本でも同性コンはまだ認められていません。海外では、好きになった人がたまたま同性なだけで死刑になる国が十二ヶ国。禁刑は二十七ヶ国あり、期間は十年から終身まであります。終身とは、ずっとという意味です。逆に、同性コンが認められている国は三十五ヶ国でオーストラリア、カナダなどがあります。

世の中には、様々な性のあり方がありますが、大切なことはすべての人が自分の性のあり方にほこりを持つこと、また、お互いの性のあり方を尊重するべきだということです。つまり、一人一人が性のあり方もふくめて色々な違いを持っていて、それぞれが大切な存在なのです。けれども、社会の中で少数派であるLGBTQ+の人達がまだまだ困難をかかえている状態があります。その背景には、男らしさ、女らしさといった無意識の偏見があるからです。誰もが自分らしく暮らせるためには、家や学校、地域社会などの様々な場所でも安心して過ごせることが大切です。自分の性のあり方が周りに知られないようにしたり、周りの人に無理をして話を合わせたりしなくても、こうげきされたり、傷付けられたり、不安になったりする心配がない場所が必要です。そこはLGBTQ+をふくむ、全ての性のあり方が尊重された、だれにとっても心地よい場所だと言えるでしょう。

私がこの「LGBTQ+」に触れるきっかけになったのは、道

徳の授業の中で「男女差別じゃん」と言ったことでした。その後、本でLGBTQ+について調べてみると同性で付き合っただけで死刑になる国があることなどを知り、そんなことで死刑にされてしまうなんて思いとてもおどろきました。自分の好きな人と付き合えないことは、本当に辛いだろうなと思いました。この事を知って私は同性コンなどが認められ、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルなどの人が幸せになってほしいと思いました。この世界のLGBTQ+の人達が自分らしく生きられるようになってほしいと思っています。

差別のない世界



神倉小学校 六年

今、日本にはたくさんの方々が住んでいます。神倉小学校にも多くのクラスにも外国に縁のある友達がいます。ぼくは、色々な国の人がいるっておもしろいなと思います。ですが、言語、宗教、文化、習慣などの違いから、外国人に関する様々な人権問題が起こっています。そして、ぼくは色々な学習や今までの生活の中で、外国人について考える出来事がありました。

ぼくのお母さんはフィリピン出身です。多くの友達は、日本人のお父さんとお母さんから生まれています。片方が日本人で、もう片方が日本人ではない両親の間に生まれた子どもを「ハーフ」と言います。

ぼくは友達から言われた言葉でいやな思いをしたことがあります。そのことを先生に話すと、先生はその友達に真剣に話をし

てくれました。その友達は言ったことを後悔して、ぼくに謝ってくれました。ぼくはそれまで「差別」についてあまり考えたことがなかったけど、その時に言葉の重みを感じました。軽い気持ちで言ったことが、相手を傷つけてしまうこと、差別につながってしまうということを知ることができました。ぼくもその友達も、「差別をすること」について考えて一つ勉強になったと思います。

外国語の学習では、様々な国のことを調べました。みんなは、それぞれ行ってみたい国や知りたい国のことを調べてまとめました。ぼくはフィリピンの食べ物や文化をまとめて発表しました。みんながフィリピンのことを知ってくれたことがうれしかったです、ぼくも外国のことをたくさん知れてとても勉強になりました。

それぞれの国で肌の色や言語、文化などの違いはたくさんあります。もちろん日本とフィリピンの生活の違いもあります。ぼくは、フィリピン出身のお母さんがいて、みんなと違うところもありますが、ハーフであることをうれしく思っています。なぜかと言うと、ぼくは日本語とタガログ語を話すことができるからです。友達に、「タガログ語を話してみて。」と言われたので話すと、「すごいね。」と言ってもらいました。ぼくはその時、他の国の言語が話せることに誇りを感じました。ぼくは、日本も好きだけどフィリピンの国もとても好きです。

また、世界では様々な人種差別が起こっています。例えば、肌の色の違いから職業や結婚を制限されることです。日本でもアイヌ民族の文化や生活習慣が奪われたりする差別や歴史の過程の中で形作られた身分の違いによる差別が今の時代にも残っているのです。そうした差別を未だに受けている人がいることを知り、とても驚きました。僕は、そんな差別の問題をたくさんの人が知って、正しく理解することが大切だと思います。

外国人への差別問題をなくすためには、多様性を認め、お互い

の習慣や文化を尊重できる社会を実現することが必要です。そのために、ぼくたちのような子どもたちから、友達の違いを認めて思いやりを持つことが大切だと思います。そして、差別のない学校や社会になってほしいと思います。

文字を学ぶことの大切さ

王子ヶ浜小学校 六年



私は、勉強ができる、字が書けるということがふつうにできていることが、当たり前だと思っていました。

私は、「識字学級」と「吉田一子さん」について学びました。「識字学級」とは学校教育を受けられず、文字を書いたり読んだりすることができなかった人のために、文字の読み書きの力をつけるための学習会です。その識字学級に通っていたのが、吉田一子さんです。吉田一子さんは、生まれてからずっと貧しく、仕事や家事に追われていました。そのため、学校に行くことができておらず、読み書きができないまま、六十歳まで生きていました。その一子さんは、えんぴつの持ち方から習い始め、あいうえおの練習をしていました。字が書けないため、いろいろな悔しさや悲しさを重ねながらも、識字学級に通い、やがて作文や日記を書けるようになったそうです。今、一子さんは、自分の経験を未来ある子どもたちに、自分の言葉で伝えることが生きがいになっています。

このように、勉強ができる、字が書けるということが当たり前じゃないんだと、私は学びました。でも、一子さんの姿を見て、

文字を学ぶことで、自分の生きがいを見つけられたのは、素晴らしいことだと思いました。これから私は、勉強ができる、字が書けるということにありがたみを感じ、生きていこうと思います。

勉強

熊野川小学校 六年



皆さんは、勉強は好きですか。勉強が好きな人も、嫌いな人もいると思います。では、勉強は何のためにあるのでしょうか。

勉強をする意味について、三つの視点で考えてみようと思います。一つ目は、「将来のため」にあるということです。例えば僕たちがやっている国語や算数は、将来のために礼儀を身につけたり、計算をすぐできるようになったりすることなど、色々な役目があります。中学生になったときにはもっと勉強が難しくなるので、今のうちにしっかり勉強しておく必要があります。ここで、大切になるのが宿題です。宿題は、学校の授業で受けたところを復習するためにあります。授業で間違いがあったら、宿題でそこを復習して納得することで、内容を理解することができます。これらの宿題を出してくれるのは、皆さんの担任の先生です。先生は、授業などで、分からないところがあったらいつも教えてくれます。僕らの学校生活は、先生達のおかげでできています。だから、毎日「ありがとう」という気持ちで勉強をしましょう。

二つ目は、「友達との仲を深めるため」にあるということです。友達は授業で分からないところがあったらいつも優しく教えてくれます。僕は、友達と授業をするといつも楽しいと感じます。友

達とペア交流をするときにはお互い意見を出し合い、自信を持って発表することが出来ます。授業が楽しいか楽しくないかは友達との仲の良さも関係してくると思います。なぜなら、仲の良い友だちとなら、みなさんも普通に会話できますよね。でも、初対面の人やあんまり仲が良くない人と交流したら、なぜか気まずく感じることはありませんか。だから、僕は仲の良さも授業の盛り上がりに関係しているのではないかと思います。ゆえに、日々友達を大切にしましょう。

三つ目は、「やる気をコントロールする力をつけるため」にあるということです。みなさんは、やる気がないとどんな事になるか分かりますか。ここでいったん想像してみてください。やる気が無いと授業中ガラガラしてしまったり、宿題をやるうという気持ちにならなかったり、といったことを想像した人がいるでしょう。一方、やる気があると授業の内容が頭に入りやすくなり、宿題も頑張ろうという気持ちになります。他にも、やる気を出さないと学校に行こう、という気持ちが無くなることもあります。僕も初めは、算数は特にやる気はありませんでした。けれど、六年生になると、友達と一緒に問題に取り組む時間が増え、だんだんと算数の面白さに気付いていきました。今では、算数が大好きです。だから、みなさんもやる気を出して勉強や宿題をしましょう。

僕は、勉強には以上のような意味があると考えます。僕の話聞いて勉強の大切さに気付いてくれましたか。皆さんも、もう一度勉強をする意味について考えてみてください。そして、気合を入れて勉強をしてみませんか。

「人権」って何だろう

三輪崎小学校 六年



「人権」って何だろう。あなたは、「人権」について深く考えたことはありますか。授業以外で「人権」について深く考える機会は少ないと思います。しかし、「人権」とは、自分たち人間が平和に、幸せに生きるための最も大切なことの一つです。では、「人権」についても少し深く考えてみましょう。

例えば、体に障害がある人が、不当な扱いをされたり、自分との違いを言葉にして突きつけられたりして、傷ついてしまうことがあります。これは、人の心を傷つけた加害者が「人権」に気づいていないことが主な原因だと思っています。学校でも、相手の気持ちを考えずに発言してしまっている人を見かけることがあります。

僕のいとこに、自閉症の子がいます。自閉症とは、一般的に、人とのコミュニケーションが苦手、物事に強いこだわりがある、などの特徴があると言われています。しかし、そんな特徴があるのにも関わらず、そのいとこは他の子と同じように楽しく学校生活を送っています。それは、本人持ち前の明るさがあるのもちろんのこと、周りの人が、自閉症を理解し、認め、対等に接しているからだだと思います。

あなたは、金子みすゞさんの「わたしと小鳥とすずと」に出てくる、「みんなちがってみんないい」という言葉を知っていますか。この一文には、「お互い違うから、お互い大切なんだね。」「誰も間違っていないんだよ。」と色々なメッセージが込められています。互いの違いを認めるからこそ、人権意識を高くもつことにつながるのではないかと思います。

今、この世の中は、みんな平等を実現しようとしています。しかし、年齢、性別、障害などによって同じ人間をマイナスイメージで判断し、社会の中で不当な扱いをしている場面もあるように思います。「みんなちがってみんないい」の考えは、もっているだろうか。そう考えたとき、実際に人権意識をもって生活している人は僕もあなたも含め、少ないのではないかと思います。では、どうすれば人権意識を高くもてるのか。

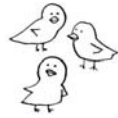
僕は、お互いを理解し合い、認め合い、助け合うことが重要だと考えます。あなたと、あなたの周りにいる人との関係はどうですか。みんなで支え合って生活していますか。改めて質問されたら、答えるのが難しいですね。僕も、百パーセントの自信をもって「はい」と言いきれません。でも、これからは、自信をもって「はい」と言えるように、自分の言動に責任をもち、まわりにいる人を思いやることを大切に過ごしていきたいと思っています。

あなたも、日々の生活をふり返り一度考えてみてください。
「人権」って何だろう。」って。

中学生の部

本当のヒーロー

城南中学校 一年



みなさんも、一度はアニメのヒーローにあこがれたり、なりたかったりしただろう。悪い敵を倒したりするヒーローを尊敬したりしただろう。自分もそういうヒーローにあこがれたことがある。しかし、自分は、あることをきっかけにヒーローへの価値観が変わった。そのきっかけは、自分がいつも通りアニメを見ているとき、キャラクターのおじいさんが孫に言っていた「悪い敵を倒すのがヒーローだと思うか？じいちゃんは、そう思わない。じいちゃんは、大切な人を守ったり、命を助けたりするのが本当のヒーローだと思う。」というセリフだった。自分はそのセリフに深く共感した。たしかに、犯罪者を捕まえる警察だけがヒーローじゃない。火から人々を守る消防隊の人たち、病気から人を守る医者の人たち、お年寄りを助ける介護ヘルパーの人たち、子どもたちに勉強を教える学校の先生たち、このような人々を助けている人たちが全員が、本当のヒーローだと思った。そして、これから自分はどうしたら色々な人々を助けられるヒーローになれるか考えた。まず、一つ目は募金を考えた。募金をすれば世界で苦しんでいる子どもたちを助けられると思ったからだ。二つ目は、町のゴミ拾いを考えた。ゴミ拾いをすれば、町に住んでいる人が気持ちよく暮らす助けができるからだ。三つ目は、他人に優しくすること考えた。他人に優しくすれば、みんなが楽しく生活する助けができるからだ。

この三つの中で一番最初にできることは、他人に優しくすることだと思う。他人に優しくすることは、生活する中でいつでもできるからだ。例えば、友だちのことを手伝ったり、家族の家事を手伝ったりすることで他人を助けることができる。募金や町のゴミ拾いもふだんの暮らしの中でできると思う。例えば、募金はコンビニに行ったとき、おつりを募金箱に入れることができる。町のゴミ拾いは、学校行事のクリーン作戦や友達と休みの日に学校周辺のゴミ拾いをするなどできる。こんなことを日頃からすれば、自分もヒーローになれるんじゃないかと思った。本当のヒーローについて、他の人たちに教えたいと思ったけど、直接教えるのは難しいと思った。だから、この作文を書いて、他の人たちにも、本当のヒーローは大切な人を守る人たちで、ただ悪人を倒す人のことを指すのではないということを考えて欲しかった。本当のヒーローについて、他の人たちが考えてくれば、色々な人たちが募金したり、ゴミ拾いをしたり、他の人を助けたりしてくれると思った。そうなれば、人を助ける意識が強くなって、世界が今より少しは平和になると思った。ヒーローになることは、決して難しいことじゃない。誰もがなれることを自分はたくさんの人に教えたい。これからできるだけたくさんの人に本当のヒーローについて教えようと思った。

自分

熊野川中学校 一年



皆さんは意見ってどれくらい大切だと思っていますか。意見と

いうのは自分、または周りの気持ちや考えで、生きているとたくさん意見や考えに出会ったり、ぶつかると思います。いろんなところで意見というのは溢れていて、いろんな考えに触れると、周りの知識が深まったり、想像力を成長させることができたりすると思います。皆さんにはそういった経験があったりしませんか。学年が上がったとき、新しい先生の授業を初めて受けたとき、友達ができるとき。たくさんの変化に対応してたくさんの方や意見に触れてきたと思います。ですが、今まで自分になかった考え方に触れると自分が前まで持っていた考え方が小さく、あまり良くなかったものに思えることがあったりします。例えると、意見を出し合う授業で周りにいる誰かがすごく深いことを言って、自分が思っていたことが恥ずかしくなるみたいな感じですか。こういう経験をしたことのある方って結構多いんじゃないですかね。

自分が「○○のようなことをしてみたい」「○○を目標にやっていきたい。」と言うと、「貴方には難しいと思うよ。」「こっこのほうがいいよ。」と言われてしまうことがあったりします。こう言われてしまうと皆さんはどんな気持ちを抱きますか。私はきつと残念などのネガティブな気持ちを抱きます。でも、きつとそう言ってくれた人は、悪意があって言っているわけではないと思います。むしろ、こちら側のことを思って言ってくれていることが多いと思うんです。ですが、そこで言ってくれた意見を受け入れすぎてしまって「やっぱり私には難しいよね。」「そっちの方が結果的にはいいか。」と思い込んでしまうと何も変わらないと思います。つまり、自分を変えたかったら、自分を成長させたかったら、自分の思いを怖がらずに自分に正直になるというのが大切だと思うんです。周りの意見を受け入れるのはすごい力で、社会にも必要な能力です。でも、自分の意見はもっと大切に自分で嘘をついてしまうのは辛く、良くないことだと思います。自分

以外は自分ではなく、自分の本当は自分にしかわからないんです。「自分の目指すことがわからない。」「自分の一番の意見がわからない。」そう思っている方も少なくないと思います。実際私もそうでした。親や信頼できる人たちの意見を聞いていればまあ大丈夫だろう。うまくいくだろう。とっていました。でも、きっとそれじゃあ成長もできないし、変わることもできないと考えるようになってきました。こう思うことだけで前より少し成長できたと思います。

急に自分を見つけて行動しろ。と言われてすぐに行動に移すのは簡単ではなく、どちらかというと難しいと思います。自分の気持ちを見つめるのはすぐにできるようなことはありません。私も大切なと思うことに気づけただけで自分の一番は見つけれません。だから見つめる努力をしたいと思います。きつと、自分の気持ちを見つめる方法はたくさんあります。例えば、どこかのサイトで歌や名言を聞いて感動、納得すれば自分の気持ちに近づけると思います。他にも、ノートやパソコンなどの書き残せるものに自分の気持ちを気にせず思いっきり出すのも近づける一歩だと思います。私は、方法や思ったことに正解も不正解も価値をつける必要はないと考えていて、自分次第でハッピーエンド、バッドエンドにできると思います。自分の思ったことに納得しなかったり、胸に落ちなかったときに投げ出すのも悪いことではないと思います。自分は自分の好きなものになる。つくっていく。というのすごく素敵です。自分を深くまで知って、自分にとっての好きになる。そうするときと成長ができるし、その成長で自分を深くまで理解できる。というのが私なりの考えです。私はこの考えにたどり着けたとき、前より少し自分を好きになれた気がしました。

私はこの人権作文を書けて良かったと思っています。この作文

を書く前は自分の意見を優先するのではなく、言ってもらったことによく頭がいて、一番いい方向に行くものについて行っていました。過程ではなく、結果だけを考えて動いていました。でも、この作文を書いていくうちに自分が怖がっていたという事実気づきました。それに、「もっと変わっているんな自分を知っていたきたい。」という前まで知らなかった自分の気持ちにも気づけた気がします。

きっと自分の奥にある気持ちに気づいていない人や自分の考えに自信がない人はたくさんいると思います。私は、そんな人たちの後押しになる作文になればと思います。

価値観

光洋中学校 一年



「私たちは、安全な暮らしができるのが普通だ。」そう考える人もいるのではないだろうか。でも、その「普通」は、世界をみると、全く通用しない。戦争で家や家族を失った人々、飲み水がなかったり、汚かったりする人々、犯罪だらけの街に住む人々など、世界では様々な危険にさらされる人がいる。

たとえ日本でもそうだ。ホームレスの人は家がないし、貧しい人の中には制服が買えないような人もいる。「でも私には関係ない」そう思う人もいるかもしれない。でも私たちだって、百パーセント安全とは言えない。自然災害、事件、事故など、私たちの周りにも危険はある。だから、初めに述べた考えの例は、私は間違っていると考ええる。

世界では、産まれた瞬間から「死」となり合わせの子どもたちもいる。産まれた地域が戦争中であったり、全体的に貧しくて食料が少ない地域だったり、重大な病気を持っていたり、そんな子どもたち、人々も日本が少ないだけで、世界にはたくさんいるのだ。それに、少なくとも、日本にだってそういう人たちはいる。私も幼い頃は、安全な暮らしがあって当然そう思っていた。でも、ニュースを見たり、色々な学習をするうちに、だんだんと安全な暮らしはありがたいものと考えられるようになってきたのだ。私も幼い頃、身近にハンデを持った人がいなかった。そして、実際に見たことも少なかった。だから、「そんな人がいる」という実感も湧かず、どこか遠い所にいる、つまりどこか他人事のように思っていた。

しかし、私はその考え方を、小学三年生の時になくした。みくまの支援学校へ行った時、ハンデのある、同年代の人たちを見て、その人たちが身近にもいることへの実感が湧いたのだ。

ハンデを持つ人以外でも、危ない状態の人、「安全な暮らしが普通」という見方が通用しない人も、世界にはたくさんいる。皆さんは「ユニセフ」のCMを見たことはあるだろうか。それは、世界中の支援が届きにくい地域の子どもたちを支援している組織である。ユニセフが支援する地域は、例えば食料がなくて十分に栄養がとれていなかったり、子どもも働かなければいけないくて、教育できなかったりする子どもが多い地域だ。そんな地域に住む人々は、安全とは程遠い生活をしている。

衛生面が悪く、いつ病気になってもおかしくない暮らし、食料がなく、栄養失調になるくらいなど、そんな生活を送る人たちもたくさんいる。

以上の事を踏まえて私が言いたいのは、「私たちの生活は当たり前前ではない」そして、「普通の見方が違うからといって差別、

いじめをしないでほしい」そしてもう一つ、「私たちの価値観を押しつけないでほしい」ということだ。もちろん、差別やいじめは人権侵害である。そして、私たちの環境はとても恵まれているということも、自覚はあると思う。けれど、「価値観の押しつけ」はどうだろうか。私が例に挙げた人以外でも、無意識のうちに友達にしていけないだろうか。「自分が好きなものは、あの子も絶対好きだろう」という考え方で、何かを押しつけたりされた人は、表面ではありがたそうにふるまっても、心の中で嫌がっていたり、悲しんでいたりするかもしれない。それがエスカレートすると、いじめになってしまう。

私は、誰もいじめられてほしくないし、いじめっ子も出てほしくない。だから、「普通とは何か」を考え、私が先ほど言った三つのことについても考えてみてほしい。

「言葉」が人を繋ぐ

緑丘中学校 一年



「ごめんね」と「ありがとう」みなさんは、このような言葉を言ったことがありますか？だいたいの人には言ったことがあると思います。このような言葉は人と人を繋いでくれるやさしい言葉です。私はこのような言葉が人と人を繋ぐと感じたのはつい最近です。

ある日、学校の掃除の時間の時に、友達に掃除道具を取ってもらいました。取ってもらったので私は「ありがとう」と友達に言いました。すると友達は「ありがとうってこんなにいい言葉なんやね」と言いました。私は「ありがとう」というのを自分の中で

は普通かなと思っていたので不思議に思い、友達に「なんで？」と聞いてみました。すると、「他の子にも道具をとってあげたけど、他の子はありがとうって言わなかったから。」と言いました。私はその説明を聞いて、自分が普通だと思って言った言葉でも、人によってはすごい重い言葉なんだなと思いました。それに、私は「ありがとう」と言って良かったなと思いました。なぜならこのような一言でも喜んでくれる人がいるからです。また、「ありがとう」と同じように「ごめんね」も人を繋いでくれる言葉だと感じた出来事がありました。中学校に入学してから、いろんな友達と仲よく遊ぶようになりました。けれどその分けんかも増えました。その時に「ごめんね」と私が言うと、友達も「ごめんね」と言ってくれました。この時に「ごめんね」も人を繋いでくれるんだなと感じました。でも、全ての言葉が人を繋ぐとは限りません。例えば、暴言や相手が傷つく言葉を言ってしまったら、自分から自然に人が離れていってしまうかもしれません。また、相手から「ありがとう」や「ごめんね」などの言葉を無視してしまっても人が離れていくかもしれません。このようなことが起これば、言葉が人を繋げていないということになります。逆に、「おはよう」や「行ってきます」は、言われた側は「おはよう」、「行ってらっしゃい」と返すと思います。これは、言葉が人を繋いでいるということになります。

例を挙げてきたように、言葉は人の捉え方によっては重みがあり、そして、人を繋いでくれます。しかし、相手が傷つく言葉や、暴言を言ってしまうと、言葉が人を繋がなくなってしまうかもしれません。なのでより多く言葉で人を繋ぐために、何かを言われたら返事をしたり、相手が傷つかない言葉で会話をしてみてもどうでしょうか？そうすることで言葉が人を繋ぎ、人とのコミュニケーションがとれるかもしれません。

仲間への信頼

城南中学校 二年



僕は友達や仲間に対して、自分の考えや意見を伝えるのが苦手だと思う。学校生活やサッカーでも、まだまだ思い切って言葉にすることができていないような気がしている。今まではこれだいたいと思っていただけ、学年が上がって、少しずつ自分や周りの仲間達が成長していく中で、自分の苦手なことを乗り越えていかないとダメだと思うことがある。この作文を書きながら、どうして思い切って言葉にできないことがあるのか、これからどうのようにしていけばいいのかを考えていこうと思う。

まず僕は友達や仲間に対して気を遣いすぎてしまうことがある。友達といえるのは楽しいし、仲間を大切にしたいという気持ちはある。もちろん持っているが、自分の想いや考えがあっても、周りに合わせてしまったり、考えていることを伝えずに終わってしまうことがある。だからといって、別に困っているわけでも悲しいわけでもないから、あまり気にしていない。みんなと仲良く、うまくいけばそれでもいいと思っている。ただ、最近になってそれだけではいけないと思うことが増えた。それは、一生懸命に取り組んでいるサッカーのことだ。仲良く頑張ればうまくいくわけでも、自分が上達するわけでもない。真剣に勝負する中で、誰かに遠慮してしまい、「自分の考え」というコミュニケーションにおいてとても大切なことを伝えていないことに少しずつ気付いてきたからだと思う。サッカーでは「試合に勝つ」という目的を持って、普段の練習や試合に取り組んでいる。つまり、チーム全員の目的を達成するためには、お互いの意見を伝え合うことが必要ではなく、あ

る。そんな当たり前のことは分かっているはずなのに、なかなか出来ない理由は何なのか。それは、思い切って伝えることで、自分の意見を受け止めてくれるかどうか不安の方が大きかったからかもしれない。思い切って伝えることが怖かったのかもしれない。意見をぶつけ合っても伝えなくてはいけないと思う。その方がきつといいプレーができた、お互いの気持ちに分かち合えて、良い結果につながるはずだと思う。伝えることを遠慮してしまふのは、チームとして気持ちがつながることの大切さをきちんと理解できていなかったことや本当に受け止めてもらえるかの不安が大きかったことが理由かもしれない。今、改めて考えると、友達や仲間を信頼し、想いを伝えることの大切さを感じている。また、自分が聞いてあげる側になった時は、安心して伝えてもらえるような信頼関係を作っておきたいと思う。

これからの自分の目標は、どんな場面でも自分なりの一生懸命が出せること、勇気を出して周りの仲間達に言葉で伝えることだ。そして、自分のためだけでなく、仲間や友達のために一生懸命になれる人を目指して、これからも頑張っていきたい。

「ありがとう」を言いたい人

熊野川中学校 二年



私には、感謝を伝えたい人がたくさんいます。私は、お母さんやお父さん、おばあちゃんやおじいちゃん、先生や友達に感謝を伝えたいです。

お母さんやお父さんは、私を大切に育ててくれています。お母

さんとお父さんは私たちが生活できるように働いてくれています。毎日ご飯を作って、掃除をして、食器を洗って、洗濯をしてくれます。たまに掃除や洗濯を手伝ってと言われます。私はいつも面倒くさい思いながら手伝ったり、手伝わなかったりしています。だから私は、お母さんもお父さんもいつも文句を言わずにしてくれていることがすごいことだと思いました。仕事が休みの日には、仕事で疲れていても、色んな場所に連れてってくれます。毎日、お風呂に入るのは子どもからなので、お母さんとお父さんはいつも寝るのが遅くなってしまうです。それでも、お母さんは毎朝早起きをして朝ごはんや学校に持っていく水筒の準備をしてくれます。お姉ちゃんが高校生になってからは、毎日夜にお弁当の準備をしています。お母さんもお父さんもたくさんの時間を私たちに使ってくれています。私は、それはとてもありがたいことなのだと思います。だから私はお母さんとお父さんに「ありがとうございます」と言いたいです。

おばあちゃんやおじいちゃんは小さい頃からずっと私たちをかわいがってくれています。色んな場所に連れて行ってくれて、一緒にたくさん思い出を作ってくれました。おばあちゃんとおじいちゃんの家には、たくさん写真が飾ってあります。写真の中のおばあちゃんとおじいちゃんはいつも笑っていました。私は、小さい頃よく「疲れた」と言って、おばあちゃんにおんぶしてもらっていました。私は、それがとてもうれしかったです。おじいちゃんはおばあちゃんより一人で歩いていました。でも、少しずつ一人で歩くのが難しくなっていました。私が小学校高学年になったときには、ほとんど寝ているところしか見なくなりました。おじいちゃんはお外に出かけることも少なくなっていて、私がおじいちゃんとおばあちゃんの家に遊びに行くことも減ったので、私がおじいちゃんと会う回数もだんだん減っていました。私が中学一年生

の冬ときには、おじいちゃんは病院で暮らすことになっていました。コロナウィルスの影響もあり、面会することができませんでした。おじいちゃんが病院に行ってから私は一度もおじいちゃんに会う事ができませんでした。私はおじいちゃんに「ありがとうございます」ともって言っておけばよかったと後悔しました。

先生は私たち生徒にたくさんのことを教えてくれました。私は保育所に慣れてないとき、保育所に行くのを嫌がっていました。でも、保育所の先生達と遊んだり、話したりするうちに、どんどん保育所のが好きになりました。私はお昼寝の時間が好きでした。保育所の先生が昔話を聞かせてくれるからです。昔話の登場人物を子どもの名前に変えて面白く話してくれました。小学校は保育所とは全然違いました。たくさん先生の先生がいて、授業や宿題がありました。苦手な教科や分からない所を分かりやすく教えてくれました。休み時間は一緒におにごっこやかくれんぼ、ドッジボールをして遊んでくれました。中学校からは部活が始まりました。テニス部の顧問の先生や三年生はテニスがとても上手でした。サーブの打ち方やレシーブの打ち方を教えてくれました。中学校は、小学校とは違い、中間テストと期末テストがあります。先生はわからない問題の説明をしてくれたり、テストでやすい問題のプリントをくれたりします。保育所、小学校、中学校でたくさんのお話を教わりました。私はたくさん先生の先生に「ありがとうございます」と伝えたいと思いました。

私にはとても優しい友達があります。中学校で日直になったとき、日直の仕事を手伝ってくれました。中学一年生のときの学習発表会で、クロームブックを使うときに、クロームブックの使い方を教えてくれました。私はそんな優しい友達に「ありがとうございます」と伝えたいと思いました。

私には「ありがとうございます」を言いたい人がたくさんいます。普段、

改まって「ありがとう」ということはないけれど、いつか「ありがとう」と言えなくなってしまうかもしれません。だから私は、自分の思っていることを隠さずに伝えることが大切だと思います。

変わりゆく人権

高田中学校 二年



私の昔の夢は、パティシエールでした。小学校四年生の時、この夢を語っていたら、

「でも、将来その仕事があるかわからないよね。」

と言われてしまいました。その理由は、わたしが大人になる頃には、AIが仕事をしてくれる時代が来るからでした。

AIは、アーティフィシャル・インテリジェンスを略した言葉で、人工知能を指します。人工知能は、人間の知的活動をコンピュータで模倣して作成したもので、スマートフォンなどに搭載されている音声認識や、画像認識、自然翻訳などに活用されています。また、エアコンの「AI気流」や、お掃除ロボットなどにも搭載されている機能です。

このように、AIを搭載したロボットやAIによって、将来は四十九%の仕事が人間の手で行われなくなります。例えば、一般事務職や電車の運転手、スーパーやコンビニの店員、銀行員、警備員などの仕事がなくなるとされています。アメリカでは実際に二〇二三年一月～八月までに事務職で約四千人が解雇されています。そこで、私たちが問題視すべきなのは、AIによって失われる人権があるのかです。考えられるのは、私たちの能力低下と職

業選択の自由です。職業選択の自由については、日本国憲法第二十二条第一項にて「何人も、公共の福祉に反しない限り、居住、移転及び職業選択の自由を有する。」と規定されています。これは、自己の従事する職業を決定する自由を保障されており、また、「営業の自由」も含まれています。このような憲法がAIにも持たされるのか、ある仕事の中だけで人に与えられるのか。それによって、憲法も少し変わると思います。

一方で、AIによって守られる人権もあります。例を挙げると、一つは仕事の効率が良くなることです。実際に人の手でしなくてもよいところをAIに任せることです。ストレス解消法として取り入れているところもあります。そしてもう一つ、教育や介護などの平等化にも活用できます。平等であるべきことはたくさんあります。主に福祉や教育、医療などだと思います。介護では今後、少子高齢化によって人手が必要になります。AIロボットを各家庭に置くなどして、人手不足が解消されると思います。

そんな中でもAIでは不可能な、人の心が必要になる仕事もあります。例えば、お医者さんや、カウンセラー、保育士などの幼児に関わる仕事、サービス業などです。お医者さんやカウンセラーは、人の感情や意図を理解し、なだめたり、時にはその人の道しるべになったりしなくてはなりません。また、保育士などは、子どもたちの将来抱く感情や考え方を左右することがあります。サービス業も人の思いやりがなければできないことです。私も実際に病院に行ったり、カウンセリングの先生と話したりしたことがあります。病院で誰かと話したわけではないですが、親の友達が看護師の中にいたらしく、手術中何度も励まされました。また、カウンセリングの先生と話した時は、言葉の意味の確認や、共感をしてくれました。これは、人生の経験がある人にしかできないことだと思いました。

私は、この作文を書くまで、AIが人工知能を指すことも、AIがすでに活用されていることも知りませんでした。AIは人の権利を奪うおそれがあるけれど、同時にAIが守ってくれる権利もあります。そんなAIやAIロボットと私たちは将来的に共存していく必要があると思います。独立するAIや感情を持つAIが生まれたとしても、怖がったり期待をしすぎたりせず、お互いを受け入れ対等な関係であることが大切です。その中でも、AIを勝手に利用して何かを生み出したり、傷つけたりしないことが大切だと思います。

個性豊かな社会であるために



近畿大学附属新宮中学校 二年

「十人十色」

皆さんはこの四字熟語を知っていますか？似たような四字熟語で「三人三様」や「百人百様」などもあり、このうちのどれかを聞いたことがあるという人も多いと思います。これらの意味は一人一人色々な個性があり、性格や顔、好みや考えることなど人によって違うというものです。十人いれば十人の個性があり、その個性を尊重し合うことが大切です。これは三人であろうが百人であろうが同じことが言えます。世の中には誰一人として自分の中にある個性を出してはいけない人などいないのです。

私はずっと自分の声が嫌いでした。なぜなら私の声は低く、クラスの女子みたいに可愛い声は出せなくて、いつも小さい声で喋ってしまうからです。友達に「声小さいから何言ってるか聞こえな

い」と少し怒り気味で言われたこともありました。なので発表などは苦手で直前はいつも頭が真っ白になります。そんな中、初めて会ったある人からこう言われました。

「そんな低い声でボソボソ喋られたら何が言いたいのか全く聞こえてこない、相手に伝わるようにはっきり大きく喋れ。」

それを言われた瞬間、自分のもっているものを最大限に否定された気がして、思わず泣いてしまいました。確かに声は低いし喋る時は小さいです。そのことは自分でもちゃんと分かっています。でも大きさは変えられたとしても声の低さはどう自分が頑張ろうが別人のように完璧に変わることはありません。初対面の人に言われたたった一言で、私はものすごく心が痛みました。あの言葉を自分に言った人はネタで言ったのかもしれないし、機嫌が悪くてつい言ったのかもしれないし、単純に私の声が不快で言ったのかもしれないし、言った人の気持ちは自分には全く分かりません。逆に自分の気持ちはその人には分からないと思います。でもそれを言われたから病んでしまいました、それを言われたから亡くなってしまいました、なんて言われた時その人はどう責任をとるのでしょうか。自分では気づかないような些細な一言でも誰かを追い込んでしまう可能性だってあるはずです。誰かの個性を否定するようなことは絶対に言うてはいけないと思います。いじめなんかもそうです。いじめを受けている人の人権は本当に守られているのでしょうか。人権っていうものは言葉だけであって守られていない人も実際にいるのではないのでしょうか。私が人権作文を書く時、いつもそう考えます。逆に言うど守られていないからこそ、こうした作文やポスターなどでの訴えかけが続いているんだらうなと思います。いじめにも色々種類があります。悪口や陰口、ネットでの書き込みや嫌がらせなどさまざまです。それらのいじめをする人は

作文やポスターでの訴えかけに気づかない人です。自分は悪くない、いじめられる側が悪いんだといった気持ちでやっているのかもしれないし、誰かをいじめたりすることがその人自身の正義だと思い、やっているのかもしれないし。私の周りの人達は優しい人が多く、いじめられたことはありません。もちろんいじめたこともないと思っています。なのでいじめの被害者である方達の気持ちを完璧に理解することが私にはできません。誰かの思ったことが全てわかる超能力者でもなければ言ったことは百発百中で当たるような有名な占い師でもないです。なので一人の平凡な中学生がこうしようと決めて行動を起こしたところで世界中のみんなが救われることはほぼないです。でもその願いを近づけるためにできることは探せばいくらでもあると思います。いじめられている人に寄り添い悩みを聞いたり、大人の人に相談してなにか少しずつでも変えようとしてみたり。みんなの個性を出していく、十人十色の社会をつくっていくためには子供や大人は関係なく、みんなで協力して、問題を解決していく必要があると思います。

十人もいれば十色違う色という名の個性があり、その個性をみんなが最大限に出していくことが必要です。みんながそうするためにはいじめの被害者である方達の人権や個性をみんなで一人一人守っていく必要があります。そのためにはちょっとした声かけやあいさつなどの思いやり一つで救われる人は必ず出てくる、そう思います。

障がいの区別はいるのか

近畿大学附属新宮中学校 二年



実は、私は小学生時代、密かに、

「特別支援の子たちって、甘やかされていないか。彼らには努力が足りないのではないか。」と思っていた。ただこの頃の私はこの世界の評価は、「できる・できない」であると思い、世界を一本のものとしか見ていなかった。

しかし、私のその考え方は、しだいに変わっていったような気がする。それには、弟の影響が多かれ少なかれあったのであろう。彼が生まれた時、私は小二であった。上の弟が生まれた時はまだ私に物心がなかったから、実質初めて人が生まれるということを経験した。すごく嬉しく、不思議な気持ちだった。これからどうやって立ち、言葉を覚え、大人になっていくのだろうか。ただひたすらその頃は、彼の成長を心待ちにしていた。しかし、彼の歩む時間は、私たちの時間よりも遅かった。彼の成長は、一般とされているものよりゆっくりだった。だから私は、当時、「〇歳からのおもちゃ」などと書かれているものを見て心を痛めた。なぜだろう。彼を見るとそう思っていた。私のこれまでの価値観である、それは努力が足りないだけだと思っていた。しかし、そこには努力もなにも存在していなかった。ただ愛おしく、純粋に生きていく弟がいるだけだった。ついに、私は自分の考え方、価値観を変えなければならなかった。『できる・できない』、『努力家・無精者』というその一方向にしか見ない見方を変えなければならぬ。もっと俯瞰的で、寛容な見方ができるはずだ。この世界はもっと複雑である。とそこでようやくにして気付いた

のである。それまで私はなんだか不自由なく暮らしていた。だから私はそれが基準なのだと思っていたのだろう。しかし、この世の中には、何かしらの不自由を抱えて生きる人がいるのだ。それなのに、その人たちに努力という言葉でどうこうさせるのはおかしい話である。この世の中は、努力という言葉だけでは、どうしようもできない一面があるのだ。

そこで私は一つ言いたい。

「障がいの区別はいるのか。」

と。私の弟は発達障害と診断されたらしい。しかし、彼は彼のスピードで着実に成長している。彼は一生懸命に毎日を生きている。それなのに、冷たいこの漢字四文字で彼を片付けてよいのだろうか。この四文字だけで彼を説明してよいのだろうか。

第一、近年この社会は、何にでも名前をつけようとするきらいがある。LGBTQやADHDなど、物事を分かりやすく説明するのにはよいが、私は、その人たちがその一言で片付けられてしまう気がするのである。その人の長所や特徴が第二にされてしまいう気がするのである。人は少数の不思議な人を見ると奇妙に感じる。これはいたって生物的な反応であり、仕方がないものである。だが、この奇妙さを、名前をつけるなどして解決させようとするのは間違いだと私は思うのである。たとえば、癌などの病気などなら、生きるために、名前がつけられなければならない。しかし、発達障害などの名前はいるのか。それで区別されていいのか。もしその区別が差別になれば、それこそが人権の危機ではないか。だから私はこの社会にお願いをする。どうか障がいの区別をできるだけ少なくしてください。車いすでも行ける場所や、騒いでいる子がいてもカバーできるような教室をもっと作っていただきたいのです。

しかし、これは私自身も関わらなくてはならない。私も、弟の

ため、全ての人々のために、よい社会を築く一員になりたい。

一人にさせない社会のために

近畿大学附属新宮中学校 二年



先日、私は薬物乱用防止教室を受けました。そこでは、薬物の危険性ではなくなぜ使ってしまうのか、なぜ薬物乱用が再発してしまうことが多いのかを教わりました。悩みを抱え込んでしまい、そのつらさを少しでも楽にするため薬物乱用につながってしまうこともあるそうで、一人にさせないということが大切だと学びました。

一人にさせないということは、薬物乱用についてだけではなく、他のことにも大切だと私は考えます。最近、有名人の方が自ら命を絶ってしまうニュースを見ることが増えました。私は、このようなニュースを見ていつも悲しく思います。そこで考えてみると、このことも相談しづらかったり、わかってもらえないだろうと考えてしまい一人で悩むことがその結果につながってしまうのではないかと思います。また、最近聞くことが多いLGBTQも関係があると考えます。まだLGBTQや性的マイノリティについて社会では十分に理解されていません。そのため差別や偏見を恐れ、相談ができずに一人で悩みを抱え込んでしまう人もいます。だから、そんなことがなくなるように一人にさせない社会にしていきたいのです。必要だと思います。そのために私たちにできることは何かあるのでしょうか。

まず第一に悩みを相談しやすい環境を作るということは必要だと思います。ですが、悩んでいる人はわかってもらえないだろう、相談しにくいなど思っているかもしれない。だから悩みを一人で抱え込んではいけない、必ず分かってくれる人がいる、ということ伝えるのはどうでしょうか。今はSNSなどですぐに広めることができます。それを見て、少しでも気楽に相談できるかもしれません。ですが、そういうことを伝えるだけではなく、相談を受ける側にも気をつける必要があると思います。それは悩みを馬鹿にしたり、勝手にその悩みを他の人に話したりしてはダメなどのことです。これらを守り、理解して話を聞いてあげると、悩みも打ち明けやすくなるはず。自分のことではないから、理解しにくいこともあるかもしれませんが、悩みを聞くためには理解してあげることが必要です。私も相談したいことは家族などに話したりします。いつもしっかり話を聞いて、悩みを理解してくれるので、打ち明けやすいです。また、それでいつも気持ちになるので、これらはとても大切だと思います。またこれらは、LGBTQのことについても大切で、これからもっと広めていかないとけないことだと思います。多様な性のあり方について理解し、否定しないこと、性的マイノリティを笑いの対象にしないこと、勝手に性的マイノリティについてのことを他の人に話さないこと。これらのことはとても大切なことであり、今日からでもしていくことができることで、みんながお互いを理解し合い、一人になることがない社会にするために必要だと思います。

これから、これらの考えたことをもとに、私にできることを身の周りから始めていきたいと思っています。一人にさせないということとはここまでで書いたことだけでなく、ほかのたくさんの方にについても大切なことです。だから悩みを一人で抱える人が一人で

も少なくなり、悩みや多様な性のあり方についてたくさんの人に理解が広まってほしいです。そしてみんなが一人にならない、みんなが幸せな社会になってほしいと思います。

全員が希望を持てる社会を

光洋中学校 二年



僕の父は背が高く、痩せ型で一見怖そうだが、とても優しい。そんな父だが、九年前、僕が五歳の頃、一次性膜性増殖性糸球体腎炎という国指定の難病を患った。父の場合、未だに原因が分かっていない。この難病の症状は、浮腫や体重増加、血尿、蛋白尿、高血圧等、様々なものがあり、人により症状の度合いは異なる。

二〇一四年の春、父は異常な足の浮腫に気づき、病院を受診した。精密検査により、難病であることが発覚した。それから何度か入院を繰り返し、家にいない日が増えていった。父の入院中、幼かった僕も母についてお見舞いに行った。僕は父に、「大丈夫？しんどくない？」と、何度も聞いた。父はその度に、

「大丈夫だよ」

と、笑いながら答えていた。今思えば、とてもつらかったはずだ。実際、入院中は、ただでさえ痩せ型の父は会う度に痩せていった。よく咳き込んでいた。精神的にもつらさはあっただろう。それなのに、僕に心配をかけまいとしてか、いつも笑顔でいた記憶しかない。今、そのことを考えると、僕は泣きそうになる。

しかし、当時の僕は、大して何もわかっていなかった。「大丈

夫」の言葉を素直に受け取り、「いつ治るんだろう」と思っていた。完治し、元気になった父と会える未来を純粹に信じていた。

父の病気が発覚してから二年がたった。僕は七歳になった。その頃、今でも忘れることのできない日がやってきたのだ。父の三週間に一度の通院に、初めてついていった日のことだ。病院には沢山の患者さんがいた。僕は父と一緒に診察室に入った。僕は、実際に診察室の中で医師と父が話す内容を聞いて、父が完治することのない難病を患っていたのだということを初めて理解した。僕は、悲しくて悲しくて、そのあとのことをよく覚えていない。

あとから、毎日飲んでいる五種類以上の薬は、治すためのものではなく症状が悪化するのを遅らせるためのものであることや、食事制限があること、病氣の名前や具体的なことについても知った。

家に帰ったあと、僕は当時の入院中の父の様子を思い出した。どうがんばって思い出してみても、やはりいつもの笑顔で、いつもの優しい父の姿しか思い出せない。それは、父自身がどんなにつらい状況にあったとしても、幼い僕にそのことを隠そうとして、ずっと取り繕っていたからだろう。今その頃のことを思い返すと、とてもつらい状況にあった父に、ずっと無理をさせていたことに對して、胸が締め付けられるような思いになる。

僕が中学生になった今でも、時々、家では父の病氣について話をすることがある。

難病であり、効果的な治療法の根拠となる十分な臨床試験成績が日本ではないという現状や、完治が見込めないため悪化した場合は、血液透析しか治療法は残されていないことなど。また、医療費の負担もとても大きい。色々な話をしたが、父がよく言っていることがある。

「世の中には、お父さん以上に苦しい病氣や障害を持っている人がいる。どんな人も、この同じ社会で過ごしているんだ。健常

者といわれる人も、お父さんも、その他の病氣や障害を持っている人も、どんな人でも過ごしやすい社会こそが、社会というもののあるべき姿だと、お父さんは思う。」

本当にその通りだ。病氣のためこの世界に希望を持てなかったり、障害を持っていたりして苦しんでいる人がいたり、その上、それらを理由に差別までされたりすることがあったり、冷静に考えてみると明らかにおかしいことが、今の社会では起こっている。こんな社会は変えていくべきだ。病氣や障害を持っている人に対しての差別がなくなり、そのような人が平等に社会に参加できるようにする取り組みが、今の社会には必要だ。

僕は、父が言っていた病氣や障害を持つ人も、過ごしやすいたいと思える社会を望む。病氣や障害を持たない人が当たり前だと思っていることを、誰にとっても当たり前にできる社会を築いていきたい。そのためにまずは、今起こっている病氣や障害を持つ人に対する差別や不平等について、皆が知り、今の社会がおかしいことに気づくことが大切だ。そうすれば徐々に、差別や不平等は無くなっていくのではないだろうか。その結果、この社会に住む全員が、この社会に希望を持つことができるようになると思う。

今日も、僕は願っている。

イメージをなくそう

緑丘中学校 二年



私の肌の色はベージュに茶色がかったような色をしている。私

の部活動は外で練習するので、すごく日焼けがしやすい。

私は色白の子が凄く羨ましかった。可愛く、メディアなどでは肯定的に評価されているからだ。また、周りの人の目も気になったりもしてしまう。「肌は白い方が良い」と私は心で勝手に決めていた。

「世界の色」という二十四色のクレヨンがある。このクレヨンは世界にある四十色以上の肌の色を二十四色でカバーしたものだ。「今まで自分の絵を描くときに自分の肌の色のクレヨンがなく動揺した。」

肌色の商品はこれまでその肌に当てはまらない人に疎外感を与えてきたそう。でもこのクレヨンは世界には色々な人がいることを教えてくれる。

私は今まで肌のクレヨンといえば「うすだいだい」のイメージが強かった。でも肌色なんて人によって違うから一色に絞り込むことはできないなと考えさせられた。日本では二千年前に肌色と表記していた色鉛筆を「うすだいだい」に変更したそう。勝手なイメージによって、自分と肌の色が異なる人を傷つけたり、無意識に差別してしまっているかもしれない。

この勝手なイメージは肌の色に対することだけではない。今では様々な種類のあるランドセル。昔はランドセルは男子は黒で女子は赤色だった。男女でイメージを決めつけられてしまうと、自分の好みのものを選びにくくなってしまおうと思う。自分らしさを見失ってしまうかもしれない。分類していくことって本当に必要なのだろうか。

私はこのイメージを壊したい。私自身も今まで「肌は白い方が良い」という考えをすごくもっていた。だけど色白だから凄いわけでもおかしいわけでもない。この世に一つしかない私だけの「肌色」だから、他人と比較する必要は全くないと感じた。羨ま

しい気持ちはまだ少し持っているが、自分の「肌色」を大切にしようと思った。

周りから一歩踏み出して、周りと違う行動を引き起こすこともイメージを壊す手がかりとなると思う。多くの人と見た目が似ていたり、趣味や特技が同じだと凄く嬉しい。でもそこで終わらずに、「私はこんな考えをもっているよ」とか「私はそうは思わない」と違うところをたくさん見つけよう。そして相手だけにあげる良い所をたくさん知ることができる。多様性も認められていくはずだ。

この世に同じ人なんて誰一人いない。だから私は、周りと全てを一緒にせずに、先回りして動いて、周りを支えていける人になりたい。

認知症について（高齢者の人権）



城南中学校 三年

今、話していたことが分からなくなるってどんな気持ちなのだろう。今までできたことができなくなるってどんな気持ちなのだろう。最近、そのようなことをふと考えています。それは、僕の大切な祖母について関係しているからです。

祖母は僕の家の方に住んでいます。年齢は七十八歳になります。いつも元気で明るく、誰に対しても優しく誠実で、僕も尊敬しています。他にも、僕が卓球の大会などで活躍したりすると、誰よりも喜んでくれ、祖母の家に新聞記事を飾ってくれています。物心がついたころから、何があっても寄り添ってくれる大切な家族

の一人です。ただ、祖母は一年前から認知症を患っています。最初は、「あれ、この話、さっきもしなかったかな」「毎年祝ってくれていた誕生日を忘れてしまったのかな」など、そういったところから気が付きました。最初は驚きましたし、「これからどうなるのだろう」と心配になりました。

この一年間の間に症状が進んでしまいました。大きなことでいえば、車の免許を返納したそうです。僕は返納の話を聞いたとき、これまで無事故無違反が自慢だったので、まだまだ運転できそうだと思います。しかし、本人にも認知症の自覚があります。万が一事故を起こして、周囲に迷惑をかけてしまっただけなのではないかと考えたそうです。毎日の生活で使っていた車が使えなくなるということについては、大きな葛藤があったと思います。行きたいところに自由にいける車の便利さは田舎では特に大きいと思います。祖母は返納まで半年ほど考えていたそうです。

現在は、近場は自転車で移動し、遠出をするときは家族が乗せていくようにしています。ですが、昼間は運転できる家族のほとんどが仕事や用事で出かけてしまっていることが多いので、本当に不便になってしまったと思います。これまでは、僕も十八歳になれば漠然と免許を取るのだろうと考えていましたが、今では早く免許を取得したいと考えています。もちろんそれは、祖母の行きたいところへ車で連れて行きたいと考えているからです。祖母は花が大好きなので、そういった自然が見られるところは必ず一緒に行きたいと思います。例えば六月には丸山千枚田のアジサイなどを見に行きたいと考えています。

先日、ニュース番組で高齢者について放送されていました。祖母のことがなければ、今までの僕は気にも留めなかったと思います。その中で、認知症の方に対しての接し方を少しだけ知ることができました。それは絶対に否定しないことです。認知症を患っ

ている方も、当たり前ですが、プライドや自尊心があります。否定すること、そういった大切な部分を傷つけ、より一層不安な気持ちにさせてしまうことがあるようです。今は、そういったことも気をつけています。例えば、一度伝えたことでも「それさっき言ったよ」ではなく、何度でも伝えるようにしています。認知症を患っていても祖母自身も僕に対しての接し方は変わっていないし、僕も祖母を大切に思う気持ちは変わらないので当たり前なことだと思います。また、僕も今は十五歳で、祖母に対して大したこと何もしません。色々なことを学び、少しずつ大人になっている最中ですが、いつかは高齢者と呼ばれる年齢になり、認知症を患うときが来ると思います。これから、成長するにしたがつて少しでも祖母の助けができるようになりたいと思います。また、逆に、祖母のように家族に慕われ、支えられる人間に成長していきたいと思います。

多様性社会

熊野川中学校 三年



皆さんは「多様性社会」というものを知っているでしょうか。調べてみるとそれは、「どんな属性、特性の人でも誰もが自分らしく生きられる社会」だそうです。もっと調べてみると、大阪府のサイトには『多様性を尊重するということは、人権教育の中で、「違いを豊かに」という表現などで大切にされています。』と二〇一六年から書かれており、僕はつい最近課題として出てきたのだと思っていましたが、結構前から課題としてあげられていたよう

です。

最近テレビを見ていると、多様性に関係するLGBTQなどの方々に関するニュースが目に入るようになりました。そもそもLGBTQとは何なのでしょう。僕は分からなかったのですが、また調べてみることにしました。すると「各単語の頭文字であり、幅広い性のありかたを総称する言葉」だそうです。最近では、誰でも使えるオールジェンダートイレというものがあります。初めて聞いたとき、僕は前からある多目的トイレで良いのでは、と思いました。そもそも多目的トイレは性別関係なく使えて、今の性別のことに厳しい時代にこそ必要なのではないかと僕は思いました。しかし、実際に調べてみると、多目的トイレは、身体に障害を持つ人々に、より良く対応できるように特別に設計されたトイレで、オールジェンダートイレはどんな性別の人でも利用できるトイレのことで、使用される目的が全然違いました。そんなオールジェンダートイレはメリットとデメリットが有り、メリットは何度も言いますが、どんな性別の人でも利用できて、LGBTQの方々が使いやすいようになっているところで、デメリットがプライバシーの問題で、トイレを男女で分けず、すべてをオールジェンダートイレにしてしまうとプライバシーを守ることが難しくなります。これは男性が使用した後に女性、女性が使用した後に男性という状況も生じ、不快に感じる人も出てしまう可能性があります。他にも法律や宗教上の問題です。特にアメリカは宗教や経済などでの問題が複雑になっているそうです。

このトイレに関することを調べているうちに、他にも、りゅうちえるさんというジェンダーレスタレントが、自ら命を絶つという、LGBTQに関する出来事をニュースで知りました。その出来事の原因は、LGBTQに関する誹謗中傷だとされています。LGBTQに関する誹謗中傷で言えば、滋賀県の大津市で性別に

違和感をもつ保育園の男の子が、保育園で「あっちいけ」や「嘘つき」と言われいじめにあい、それが原因で保育園にいけなくなってしまうという出来事もありました。

自殺に追いやったり、小さい子を不登園に追いやったりは、誹謗中傷や差別が招いたことであり、決して許されることではありません。どうしてこのような非人道的行為が繰り返されてしまっているのでしょうか。僕なりに考えてみると、それは、某アーティストの歌詞を借りるならば、「君たちったら何でもかんでも分類区別ジャンル分けしたがる。」ということになるでしょう。つまり、人間の性質で少数派の人間を虐げる、そんな性質が残念ながらあるのではと僕は考えます。障害者差別やいじめられる側というのはいつも少数派で、多数派にとって都合がいい状況に対して、何も言えない状況が作られています。

差別や誹謗中傷というのは相手がどのような心情なのか、どのような状況なのかを知らないから起こるのです。なので僕は、まず最初から否定に入るのではなく、まずはその人について知り、自分とどんなに考え方が違っていても優しい言葉を選ぶべきだと思います。そして相手のことをよく知ろうとする努力をしなければいけません。そうすれば、皆今よりもっと仲良くなれるのではないのでしょうか。しかしこの僕がこんなに真剣に語りかけても、「そんなの知らん」という態度でこれからも誹謗中傷や差別をする人も、残念ながらこの世の中では少なからずいるでしょう。だから、この社会が、このような現状をよくできるような法律を整備すること、そして私達一人ひとりがこの国の平等について真剣に考えていくことが絶対に必要だと思います。

文中にて、人間には少数派を虐げる性質があると述べましたが、それだけではなく、さまざまな多様性を肯定し、尊重できる性質もあると僕は信じています。そして僕自身そういった大人へとなっ

ていき、そういった本当の意味での「多様性のある社会」へと変えていきたいです。

在るべき日本にするためには



光洋中学校 三年

みなさんは、「ハンセン病」という感染症を知っていますか。この病気は、現代の医学により完治できるものとなっております。今ではハンセン病に罹っている人は殆どいません。それ故に、テレビやニュースでもあまり見かけず、名前は知っているものの具体的なことは分からないと言う人もいるのではないのでしょうか。しかし、過去に受けてきたハンセン病患者に対する「差別」は、皆が心に刻んでおくべきことのひとつなのです。

ハンセン病とは、「らい菌」と呼ばれる細菌に感染することによって引き起こされる病気です。主な症状として、皮膚に白や赤色の斑紋があらわれ、治療をせずに放置すると顔や手足が変形したり、失われたりするほか、知覚麻痺や発汗障害、神経痛など、様々なものが挙げられています。特にこの体の一部が変形を起こすという患者の外観に関しては、偏見や差別の対象となることがあり、ハンセン病に並んで結核、コレラ、ペストなどの大きな病気が発見された明治時代後期には、差別を受けた人も多かったようです。

ハンセン病について国がとった政策もあります。それは「癩（らい）予防法ニ関スル件」というもので、一九〇七年に制定され、一九九六年に廃止されるまで、なんと約九〇年にわたって継

続されてきたのです。ハンセン病患者はこの政策のもと強制的に施設に収容され、その後も一切の外出も許されず、患者を療養所に隔離し続けるという改善に相応しくない制度でした。ここまで長く政策が続いた原因は、ハンセン病患者に対する人権尊重の意識の低さにおける不当な扱いからくるものだったのではないかと、資料や写真を調べた際に感じました。こうして長きにわたってハンセン病患者やその家族に多くの苦しみを与えてきた差別は、たとえどのような理由があったとしても決してあってはならないのです。ハンセン病に感染し、顔や体の一部を失ってしまったり、感覚障害などがあらわれたりするとそれが後遺症として残ってしまうことや、感染力が強い、治ることのない病気といった人々の誤った認識により、数々のハンセン病患者が差別にあつてきました。数年前から世間に猛威を振るっているコロナウイルスにも偏見や差別が多く見られ、その内容もハンセン病に似通っているものばかりでした。しかし、差別というものは先ほど述べたように、本来あるべきものではないのです。

世界では、今も絶え間なく差別は行われています。日本に限らず世界中で差別を受けている人々はたくさんいます。ハンセン病について調べ、自身も悲痛な現代社会の今を知ることができました。こうしてハンセン病について触れる機会は今までなかったため、幾度となく繰り返し返され長きにわたり継続されてきていたハンセン病差別は、自分にとってもとても深刻な問題だということを知ることができました。冒頭で述べたハンセン病についても、症状や具体的な差別内容はこの作文を書くまでは自身もあまり知りませんでした。ですが、記事に載っていたハンセン病患者さんの過去に差別を受けてきてもなお懸命かつ前向きに生きようとする姿がとても心に残り、差別をどうなくしていくかを考えさせられる瞬間にもなりました。見たこと聞いたことを自分の定義で決め、

それを一途に押し通すのではなく、周りの意見に耳を傾けながら適切な結論を出し、自身を過信しすぎないことが大切になるのではと思いました。本来在るべきだった日本にするためにはどうすべきなのか。考えることが現代社会に必要なことなのではないでしょうか。

「相手を思いやる気持ち」について



緑丘中学校 三年

人権集会で、人権とは一人一人が大切にされる権利であることを確認した。また、人権問題にも種類があり、解決方法が一つではないことから、問題に対してそれぞれ違う活動が行われていることを学習した。その問題解決への取り組みのうちの一つに、「相手を思いやる気持ち」というものが挙げられていた。私はこの「相手を思いやる」ことについて、当たり前のことのように思えて実はできていない人が多いのではないかと感じる。

「思いやり」という言葉は、幼稚園や小学校でもよく聞く。だから、私は大切なことだと認識していた。しかし、思いやりとは具体的にどういうものなのか、今まで考えたことがなかった。小さい頃から言われている思いやりが大きな人権問題とどう繋がるのか考えようと思った。

私は、「相手を思いやる」とは、ただ相手に優しくしたり、相手が気持ち良くなれるよう気を遣ったりすることとは違うと感じた。「相手を思いやる」とは、相手を他人と思って見るのではなく、自分に置き換えてみることに思う。どんな相手であっても、

自分に置き換えて考えることができれば、相手を傷つけるようなことはしないでいられると思うからだ。「自分がされて嫌なことは相手にもしない」と小さい頃に言われたが、それはまず相手を思いやることから始まるのかもしれないと気付いた。

人権集会では世の中の人権問題について例をあげて説明されていた。その中に、コロナウイルスに感染した人への差別があげられていた。私は、この問題は相手を思いやる気持ちが足りないから起こっているのではないかとと思う。相手を「コロナウイルスに感染した人」として考えてしまうと、「自分は感染したくない」と自分が中心の考えになり、感染した人を遠ざけようとして差別をしてしまう。しかし、すでにコロナウイルスにかかった人を自分に置き換えることができれば、自分中心の考えになることはないと思う。コロナウイルスにかかったつらさまで考えられるようになれば、相手を思いやれているのではないかとと思う。

また、人権集会では、インターネット上の中傷も人権問題としてあげられていた。インターネット上では顔が見えないので、相手を自分に置き換えることはさらに難しいのではないかと感じる。だからといって、これ以上自分中心の考えをする人が増えてはいけない。一人一人が「相手を思いやる気持ち」を忘れないことが大切だと思う。

人権問題をなくすために必要なのは「相手を思いやる気持ち」つまり「相手を自分に置き換える」ことだ。当たり前だと思う人もいるかもしれないが、人権問題がなくならない背景にはこの当たり前ができていない人が多くいることがあると思う。私は、どんな時でも「相手を思いやる気持ち」を忘れないようにしたい。